

企画展

「真実一路」
の歩み

令和2年3月20日(金・祝)～9月6日(日)



「真実一路」連載の経緯

「真実一路」(昭和10～11年)は、主婦之友社の懇請を受けて連載された、山本有三の第五作目にあたる長篇小説です。当時、有三は、すでに「生きとし生けるもの」(大正15年)、「波」(昭和3年)、「風」(昭和5～6年)、「女の一生」(昭和7～8年)という四篇の長編小説を「東京・大阪朝日新聞」紙上で発表しており、その声望は、連載予告に「第二の漱石」と銘打たれるほどに高まっていました。

裁縫や料理、家庭医療や家計簿の付け方といった主婦向けの記事を掲載する雑誌「主婦之友」に、有三のような「純文学の作家」の作品を連載することは、雑誌社としては大変な冒険であつたと言います。有三としても、「主婦之友」での連載は気が進まず、なかば諦めさせるつもりで、自身の小説中に広告を組み込まないこと、という商業誌にとつては無理難題に近い条件を提示しました。

しかし、主婦之友社はその条件を承諾し、連載に当たっては「真実一路」掲載ページに一度も広告を載せることはありませんでした。

「真実一路」は、主婦之友社の歴史を通じて「特筆されるべき傑作小説の一つ」と称され、大きな成功を収めることとなります。^{※1}

「真実一路」に描かれた家族

「真実一路」は、父・娘・息子と、離別した母親という四人の家族に焦点を当てた小説です。未婚のまま恋人との子どもを身ごもった母・むつ子と父・義平の結婚の破綻、血縁関係はなくとも情愛を通わせ合う父・義平と娘・しず子、実の親子でありながら親しむことのできない母・むつ子と息子・義夫という、それぞれの関係性が描かれることによって、波乱に満ちた家族の物語が展開していきます。

家族の関係性が複雑に絡み合う「真実一路」ですが、有三は、この作品以前から、繰り返し家族を題材に取り上げています。

たとえば戯曲「津村教授」(大正8年)では、愛のない結婚に煩悶する夫婦を、小説「波」では、血縁を超えて絆を深め合う父子を、小説「女の一生」では、未婚の母として生きる女性の「私生児」の出産を描いています。

「真実一路」では、有三がそれまで描いてきた家族の姿が一つに集約され、社会制度としての家族への疑問や、自分に偽りなく生きるとはどのようなことかという主題がより深化されて追求されています。

後年、高橋健二が「有三の創作力の頂上期の作品」^{※2}であると述べたように、五十を間近に控えた有三の、一つの集大成を表した作品であると言えるでしょう。

本展では、有三が三鷹へ越してきた昭和11年、まさに連載中であつた本作を取り上げ、作品執筆時の有三を取り巻いていた環境や作品内容を読み解きつつ、有三が描き続けた家族の姿を探ります。長男に宛てた厳しくも慈愛に満ちた書簡や、初出誌「主婦之友」など、様々な関連資料とともに、「真実一路」に歩んだ有三の創作の世界をお楽しみください。

(文芸企画員・学芸員 三浦穂高)

※1…『主婦の友の五十年』(主婦之友社 昭和49年)
※2…高橋健二『編集後記』

(山本有三全集第八巻 真実一路 新潮社 昭和51年)

「純粹小説作家」としての山本有三

―「真実一路」と発表媒体

平 浩一

「真実一路」の内容については、すでに広く知られており、さまざまな関係書物でも多く触れられている。そこで今回は、少し角度を変え、発表媒体という側面からこの作品を見てみたい。

山本有三の長編小説は、「生きとし生けるもの」「波」「風」「女の一生」「真実一路」「路傍の石」が挙げられる。「真実一路」は、一九三五（昭和一〇）年一月から翌年九月まで『主婦之友』に連載された。すなわち、山本有三がはじめて『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』以外の媒体に連載した長編小説であった。

興味深いのは、山本有三の婦人雑誌への姿勢である。

山本有三は、「真実一路」連載の約三年半前、一九三一（昭和六）年七月、雑誌『婦人サロン』に「婦人雑誌」という評論を寄せている。そこには、婦人雑誌という媒体に対する、厳しい意見が並んでいた。まず、書き出しから「私は婦人雑誌に雑文を書いたことがほとんどない」、「婦人雑誌というものは必要なものではない。なくなってしまうほうが本当だ」と述べている。その根拠は明確で、

「雑誌に性の区別をつける必要はないから」、「そういう特殊あつかいをした雑誌がおこなわれるということは、現代の婦人にとって、はなはだ不名誉なことだと信ずるから」だという。さらに論調は強まっていき、「性の区別というものは、そうそう何の上にもつけなければならぬものであるのか」、「なぜ男にも女にも読める、ひと口に言ったら、人間全体が読める雑誌を編集しないのであるのか」と語っていく。広い視野から、社会的な問題を投げかける山本有三の姿勢が伝わってくる。

同時に注意したいのは、山本有三が、多様性自体を排除しているわけではないことだ。評論の結末部では、「私は人間の雑誌を主張するが、すべての雑誌は皆そうならなくてはならないというのではない」、「さまざまな種類があつてよいと思う」という意見も同時に提示している。――今から九〇年近く前のこの山本有三の主張に対し、どのように思われるだろうか。ここでは枚挙に遑がないため、ぜひ、実際に手に取って読んでみて欲しい。この評論は、定本版の全集にも収録されている。

こうした背景があつたものの、編集者の粘り強い交渉もあり、山本有三は「真実一路」を『主婦之友』に連載する。だが、敢えて山本有三は、小説の題目や内容を、婦人雑誌という媒体に無理に合わせることもしなかった。作風からすれば、むしろひとつ前の作品、『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載した「女の一生」の方が、タイトルも「御木允子」という登場人物も物語内容も、より婦人雑誌に受け入れられやすいものであつただろう。しかし、山本有三は同様の路線を選ばず、「真実一路」というまた異なつた様相の小説を描き出し、好評を博していく。

その後、山本有三は「はにかみやのクララ」「ストウ夫人」「新篇 路傍の石」「米百俵」など、さまざまな作風の小説・戯曲を『主婦之友』に寄稿していく。しかし同時期に刊行した、一九四〇（昭和一五）年七月の岩波書店『山本有三全集 第九巻』には、先に見た評論「婦人雑誌」を再掲し、以下のような但し書きまで附している。「この文章を発表後、数年してから、著者は感ずるところあつて『主婦之友』に小説『真実一路』を執筆したが、『婦人雑誌』というものに対する著者の根本の考えは、今も変わつてはいない」。この山本有三の姿勢は、どのように捉えるべきなのか。

山本有三は一九三三（昭和八）年二月二一日、『読売新聞』の記事で、以下のように述べていた。「新聞の小説がその日／＼面白く読ませられたら、

それに越したことはないと思ひます。けれども面白く読むといふ読者はそもくどういふ人達でせうか。新聞の読者といふものは非常に多種多様で、知識階級の人でも読めば労働者も読む、若い女も読めばお爺さんも読む、都会の人でも読めば地方の人でも読むといったやうな工合にまちまちですから、仮に誰か面白いといったところで、それが全体に受けてゐるとはいはれないでせう、「作品は一体誰を目当てにしたらよいのでせうか。どういふところに中心をおいて、何処にピントを合せたらいいのでせうか。正直のところ私ははじめて新聞小説を引受けた時このことで迷ひました」(「興味とは何か、問題とは何か」。このように山本有三は、長編小説執筆の際、さまざまな読者を区別せず、いかに幅広く読まれる作品を書くかに心血を注いでいた。

ちょうどその一〇年後の一九四三(昭和一八)年、山本有三の小説は、以下のように評されている。「政治家も、実業家も、学者も、青年も、壮年も、老人も、それぞれ自分の生活的角度から親しんでゆける文学。そして、山本氏の文学こそ、さういふものとして第一流に位するものといへるであらう。事実、私の知つてゐる限りでも、氏の読者はいまあげた方向に多数あり……」(池島重信「山本有三論」『近代日本文学研究 大正文学作家論下巻』一九四三・一、小学館)。

つまり、山本有三は、当初苦戦していた、幅広い読者層に読まれる長編小説執筆を、その後の作家活動の中で実現させていったのである。

横光利一が評論「純粹小説論」(『改造』一九三五・四)を発表したのは、ちょうど山本有三が「真実一路」を連載している最中であつた。横光はその冒頭で「もし文芸復興といふべきことがあるものなら、純文学にして通俗小説、このこと以外に、文芸復興は絶対に有り得ない」と宣言し、それこそが「純粹小説」なのだとした。これは、「純文学にして通俗小説」という要素を備えることで、広い読者層に文学作品を開いていこうという提言として見られる。今村忠純は「純粹小説論」を発表した横光利一にさがけて、いち早くそれを作品のうえに定着させていったのは有三であつたといえる」と指摘している(「作品と解説」『人と作品』34 山本有三「一九六六・一二、清水書院」)。

「多種多様」な読者層に幅広く読まれる「純文学にして通俗小説」——一口で言うのは簡単だが、当時の文学者は、その実現に非常に苦戦した。それをいち早く意識し、実現させていったという点で、山本有三の先見性と才覚は目を見張るものであつた。

『主婦之友』に「真実一路」を連載した山本有三は、先に見たとおり、その後も多彩な小説・戯曲を同誌に寄稿し、さらにこの時期、『日本少国民文庫』を中心とする児童文学の活動も本格的に開始していった。こうして彼は、敢えてさまざまな媒体に活躍の場を広げ、自らの「純粹小説作家」としての可能性を深く掘り下げながら、より広い読者層を開拓し啓蒙していったのだ。そしてついに、

彼は「国民文学作家」と称されるようになっていく。それにとどまらず、この姿勢は「ジャンル」や「区分」の垣根を乗り越えながら、その後の山本有三の「文学」の枠だけに収まらない、国語国字問題、児童教育、政治家をはじめとする、幅広い活動にもつながっていく。

こうして見ると、「真実一路」という小説は、その内容はもちろん、発表媒体をはじめ周辺のさまざまな要素からも、山本有三のその後を示す重要な作品であつたとあらためて言える。後世に残る文学作品というのは、さまざまな側面を裡に秘めている。それをもう一度踏まえた上で「真実一路」を読み返してみたとき、作品はもう一度、新たな輝きを見せていくのではないだろうか。

* 読みやすさへの配慮から、評論「婦人雑誌」とその但し書きについては、『定本版 山本有三全集 第一巻』(一九七七・四、新潮社)から引用した。

平 浩一 (ひら こういち)

国士舘大学教授。専門は近現代文学、マス・メディア、文芸復興。著書『文芸復興』の系譜学―志賀直哉から太宰治へ(二〇一五年、笠間書院)、論文「横断する作家像―山本有三像の流通とその行方」(二〇一七年「昭和文学研究」)などがある。



コラム 「真実一路」の挿絵

「真実一路」の挿絵を担当したのは、画家の近藤浩一路[1884-1962]です。山本有三より三つ年上の近藤は、「真実一路」の連載が開始された昭和10(1935)年には、すでに水墨画で独自の画風を確立させ、画家としての評価を確かなものにしていました。

「真実一路」以前から、有三は、自身の作品の挿絵に強いこだわりを見せています。「朝、新聞をみた時に挿絵がわるいと、次回の回が書きにくい」と言い、「波」の挿絵を、当時新聞の挿絵など一度も描いたことなかった画家・田邊至に、「風」の挿絵を、日本画の大家・川端龍子に依頼しています。また、「真実一路」の後に連載した「路傍の石」では、新聞社が提示した画家を断り、「南風」で知られる和田三造に依頼するなど、そのこだわりには並ならぬものがありました。有三にとって、挿絵とは、自身の作品を構成する一要素としてゆるがせにはできない、きわめて重要なものであったことがわかります。

近藤浩一路ならではの水墨の手法によって、守川家をめぐる光と影が印象的に描き出された「真実一路」の挿絵。作家と画家の共演による「真実一路」の世界をお楽しみください。



「主婦之友」(昭和10年1月号 主婦之友社)

事業報告

▶令和元年11月3日(日・祝)開催

第15回 秋の朗読会



毎年、山本有三とゆかりの深い「文化の日」に開催している秋の朗読会。第15回目となる今回は、文学座の瀬戸口郁さんにシュテファン・ツワイク作、山本有三訳の小説「永遠の兄の目」を朗読していただきました。

正しく、罪なく生きることを追求めて煩悶する主人公ヴィラータの心情を、迫真の声音で読み上げた瀬戸口さん。ご来場の皆様からは、「物語の中にのめり込んだ」、「読んでいだけで想像力が広がる」、「一つの芝居を観ているようだった」といった絶賛のお声を多数いただきました。



▶令和2年1月19日(日)開催

三鷹市山本有三記念館・三鷹ネットワーク大学共催講演会

比較文学研究を専門とする井上健さん(東京大学名誉教授)を講師にお迎えし、企画展「山本有三 翻訳ものの世界」(会期:令和元年9月7日～令和2年3月8日)の関連講演会を開催しました。「作家が翻訳を試みるとき一谷崎潤一郎、芥川龍之介、山本有三」と題し、大正教養主義時代における作家たちの翻訳事例を踏まえながら、翻訳者としての山本有三についてご講演いただきました。話題は「フランダースの犬」から村上春樹まで多岐に渡り、「時間の流れが早く感じた」「もっとお話を伺いたい」「山本有三の翻訳作品を読んで見たくなった」等の感想が多数寄せられました。参加者の学習意欲の向上につながる貴重な講演会となりました。



《ガイドボランティア》土・日・祝日の午後1時から4時まで解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL 0422-42-6233

ホームページ
<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

開館時間: 午前9時30分～午後5時

入館料: 300円(20名以上の団体200円)

・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、
「東京・ミュージアムぐるっとパス2020」利用者は無料
※受付にて「年間パスポート(1,000円)」を販売しております。

アクセス: JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分、
JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分